

1 論と例のつくり

論説・評論では、筆者が伝えようとしているメッセージが書かれているが、文章のすべてが意見で書かれているわけではない。なぜなら、意見だけで書かれた文章には根拠がなく、根拠のない文章には説得力が生まれないからである。そこで、筆者はメッセージを読者に伝えるため、具体例を用いたり、他の文章や統計資料を引用したりすることで、メッセージの内容を補強しようとする。ここでは、文章全体の内容を、主に筆者の考えや意見が書かれている部分の「論」、 「論」を補うために書かれている説明の部分の「例」として、大きく二つに分けてとらえるようにしていく。

2 例の働きについて

「例」には引用・例示・比喩など、「論」の内容をサポートする働きがあり、筆者の「論」に説得力を持たせる効果がある。たとえば、筆者がある意見を述べようとしたときに、それが一般的な考えと乖離かひりがあるかどうかを示すためにアンケート結果を提示することで、多くの人が自分と同様の考えをもっていることを具体的な事実として示すことができる。つまり、自らの意見を客観的なデータを用いて補強したということである。

このように、筆者が自分の考えを適切に伝えようとするため、「例」には読者に伝わるような具体的な内容が書かれていることが多い。文章を読むうえでは、そこに出てくる「例」が、何を説明するために書かれたものなのかを意識して読むことで、「論」と「例」のつながりをつかんでいくことができる。

3 論と例の優先度

文章全体を「論」と「例」に分けたとき、「論」は「例」よりも抽象的な内容に、「例」は「論」よりも具体的な内容になる。また、一つの「論」に対して、複数の「例」で補強していることもあるため、文章全体において、「例」は「論」よりも詳しく書かれることになる。筆者は文章を構成するときに、「論」を軸として、それを読者に伝えるために「例」を用いて文章を補強していくという作業をするため、文章のなかでどこが重要な内容なのかを把握するうえで、この二つの要素を意識しながら読むことが重要である。

「論」(考え・意見) : 抽象的・優先度高

「例」(引用・例示など) : 具体的・優先度低 ↓ 「論」をサポートする働き

+ プラスα

↓文章はただ漠然と読んではいけない。常に「論」と「例」をつかみながら読み進める習慣を身につけよう。

↓文章読解の基本は語彙力のUPと心得よ。意味のわからないものや曖昧なものがあったら、こまめに辞書を引こう。その際、国語辞典はなるべく大型のものがよい。説明が詳しいし、用例も豊富だからだ。

例題

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

著作権者への配慮から、掲載を差し控えております。
 実際の教材には掲載されておりますのでご安心ください。

(鷺田清一「わかりやすいはわかりにくい？」による)

問一 ー線①「食が進む」の「進む」の意味を簡潔に答えよ。

問二 Aに入る語句を、本文中から二字で抜き出して答えよ。

問三 Bに入る語句として最も適当なものを次のア〜オから一つ選び、記号で答えよ。

- ア しかし
- イ つまり
- ウ だから
- エ そして
- オ あるいは

問四 筆者の考えを、本文中の言葉を用いて三十五字以内で説明せよ。

重要語句

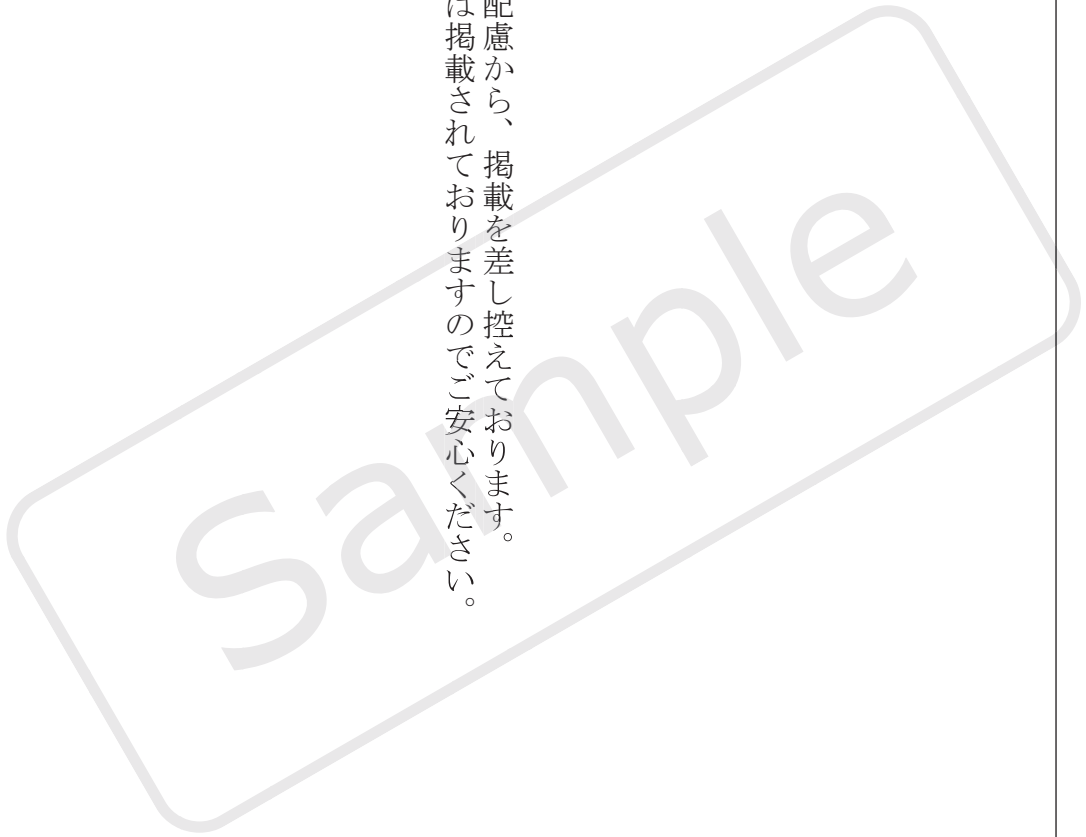
- ◇コンパ⇨食費を出し合って飲食する懇親会。「コンパニー」の略。
- ◇食い扶持⇨食べ物を買うための費用。

ヒント

- △「前に進む」の「進む」とは意味が異なる。
- △一つ前の文に「他人といっしょに食べるという習慣」とある。
- △前後の「むずかしい」「訊く」に着眼する。
- △第二・第三段落それぞれの要点を述べた箇所をまとめる。

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

著作権者への配慮から、掲載を差し控えております。
 実際の教材には掲載されておりますのでご安心ください。



25 20 15 10 5

重要語句

◇野暮⇨人情の機微を理解しないこと。言動や趣味などが洗練されていないこと。

◇通人⇨ある物事に精通している人。世態・人情に通じている

問一 — 線(a)~(c)の読みをひらがなで答えよ。

(a) 「 」 (b) 「 」 (c) 「 」

問二 [A]に入る語句として最も適当なものを次のア~オから一つ選び、記号で答えよ。

- ア そして イ つまり ウ 結局 エ さすがに オ 見事に 「 」

問三 [B]に入る語句として最も適当なものを次のア~オから一つ選び、記号で答えよ。

- ア あり得るであろう イ 例外的であろう ウ あり得なくもない

- エ 意外であろう オ 常識的であろう 「 」

問四 — 線①は誰が「わかってもらわなくてはならない」のか。最も適当なものを次のア~オから一つ選び、記号で答えよ。

- ア 欧米の読者 イ 日本人 ウ 野暮だと感じる相手

- エ 日本人の詩人 オ 欧米人の書き手 「 」

問五 — 線②「そういう間柄」とはどのような間柄か。「間柄」につながる形で、本文中から二十五字以内で抜き出して答えよ。

「 」

問六 — 線③「短小形式の美学はこうして発達する」とあるが、その理由を筆者はどのように考えているか。本文中の言葉を用いて三十五字以内で説明せよ。

「 」

問七 本文の内容に合致しないものを次のア~オから一つ選び、記号で答えよ。

ア ことばの送り手が受け手を同質と考える社会と異質と考える社会では表現の様式が異なる。

イ お互いわかり合っていると感じている者同士では、余計な表現は省かれる傾向にある。

ウ 欧米で長い詩が書かれ、日本で短詩型文学が発達したのはことばに対する心理が異なるからである。

エ 仲間同士でもコミュニケーション上の誤解を避けるためには、なるべくことばを尽くすべきである。

オ 話し手・書き手と同質的な聞き手・読み手に対しては、表現は短縮される傾向がある。 「 」

人。

△△△

△逆接的に下に続く。

△受け手に対する日本人の意識のあり方。

△第四段落は欧米人について述べている。

△「そういう」は前段落の内容を指す。

△「こうして」の内容を本文中から探す。解答のポイントは二つ。

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

著作権者への配慮から、掲載を差し控えております。
 実際の教材には掲載されておりますのでご安心ください。

25 20 15 10 5

著作権者への配慮から、掲載を差し控えております。
 実際の教材には掲載されておりますのでご安心ください。

(正高信男「子どもはことばをからだで覚える」による)

(注) 喃語…生後六〜八ヶ月の乳児が発する「ことば」になりきれない音声。「手」による喃語」は乳児の手や指の動きによるメッセージ。

ロゴス…言葉を媒体として表現される理性。

曲解…わざとゆがめて解釈すること。

デイスコース…言葉による思想の伝達。

セクト…主義主張を同じくする集団。

45 40 35 30

問一 — 線(a)～(c)を漢字に改めよ。

- (a) 「 」「 」「 (b) 「 」「 (c) 「 」「

問二 [2]段落は[1]段落に対してどのような役割をしているか。その説明として最も適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

- ア [1]段落の内容を否定して別の考えを述べている。
イ [1]段落の内容を裏づける具体例をあげている。
ウ [1]段落の内容を肯定しつつ、より高次の立場へ進めている。
エ [1]段落の問いを受けて、それを説明している。 「 」「

問三 [A]・[B]に入る語句として最も適当なものを次のア～エからそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

- ア ア 新奇 イ 作爲的 ウ 不可思議 エ 教導的
B ア 身体 イ 表現 ウ 理性 エ 動物 「 」「

問四 — 線(ア)「なるや」の「や」と同じ用法のものを次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

- ア すぐにあれやこれやと文句を言う。
イ 今や仕事も勉強もしていない日々だ。
ウ 知らせを受け取るやひどく落胆した。
エ その時の私の気持ちたるや複雑だった。 「 」「

問五 — 線(イ)「往々にして」の意味として最も適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

- ア 以前から
イ しばしば
ウ とどのつまり
エ 言うまでもなく 「 」「

問六 — 線①「こうした傾向」の説明として最も適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

- ア 文字メッセージが被支配層に大きな影響を与えること。
イ 歴史の中で支配―被支配の関係が成立したこと。
ウ 言語により支配者の地位を確かなものにする事。
エ 権力を維持するために文字を発明したこと。 「 」「

問七 — 線②「言語を『正しく』理解する努力」の説明として最も適当なもの次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

- ア 教祖の教えを忠実に守り広めてゆくこと。
イ 先人の遺産である文字としての言語を読み解くこと。
ウ 言語をテキストとして扱い理解すること。
エ 言語を身体全体を巻き込んで習得すること。 「 」「

問八 [2]段落の要点として最も適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

- ア ヒトがことばをあやつるのは、権威の世代伝達を遺産としてのテキストに託すことを目的としており、それゆえ「ヒトはことばを持った動物である」と称されることになった。
イ 今日に伝わる福音書の多くは、イエスが死亡したころに書かれたと考えられているが、それらは信者たちに教義がなぜ正当であるかを納得させるために作られたといわれている。
ウ いったん文字テキストの形で置き換えられた教義の内容は、常に執筆者の意図とは無関係に解釈されるため、テキストを書かれた意図に則して理解する手助けへの需要が生まれた。
エ 人間が自分たちの使うことばについて客観的な意識を抱きはじめたとき、すでに文字として記されたテキストをいかに理解するかに関心が向けられていた。 「 」「